

ぼうさいこくたい 2022

災害レジリエンスの実現に向けてー共創・国際・実装の取組みー

**市民が南海トラフ地震・臨時情報へよりよく対応するために
ー「家族で新聞づくりワークショップ」のご紹介ー**

東北大学災害科学国際研究所

中鉢奈津子

背景

- 臨時情報に対し社会がうまく対応するためには、キー組織だけでなく、市民の的確な行動も重要。
- 社会影響研究班で、専門家—市民の視点を行き来しながら臨時情報に取り組むさまざまな調査・研究を実施
- やや長期的な観点から、市民が臨時情報へよりよく対応するための手法をワークショップという形で開発 →本日紹介

ワークショップの出発点

- 不確実な災害リスク情報である臨時情報を、市民が的確に防災行動へつなげるためには、あらかじめ、身の周りの自然災害リスクを認識し、臨時情報をはじめとする防災に興味を持っていることが重要
- 日本では、市民の先進防災事例が蓄積される一方、多忙で、特に防災対策に至っていない市民も多数。この層に働きかけ、防災へ主体的に興味を持ってもらう意義は大きい

「南海トラフ地震が起こったら？」 家族で新聞づくりワークショップ

- ・ 研究者×科学広報・連携担当者×メディア関係者（朝日学生新聞社）による協働構築
- ・ 南海トラフ地震、臨時情報（自然災害一般）に対し、市民が主体的に取り組む「最初の入り口」とする

ワークショップの流れ

- ①地震の起こり方、南海トラフ地震、一般的な災害リスクの調べ方の講義
- ②参加者は、自分の居住環境における災害リスクと備えについて自主的に調査→新聞にまとめる
- ③参加者間で、新聞（互いの調査結果）を共有

※①、③はオンラインで

ワークショップを実際に実施

- 今回の対象者は、市民のうち小学生とその保護者
- 「朝日小学生新聞」読者から希望者を募る
- 全国の都市部から21家族が参加。小学生は3～6年中心

講義資料（一部）

「プレート」のうごきと南海トラフ地震

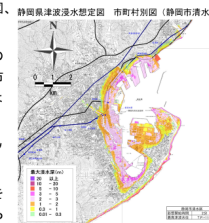


もし南海トラフ地震が起こったら、
皆さんの住んでいるところは
どうなるでしょうか？



「ハザードマップ」とは

- 災害予測地図、防災地図、防災マップ
- 子どもや地域の人たちの手づくりのものから、市町村・都道府県・国によるものまで
- 紙の地図やインターネットの地図まで
- 誰が、何のために、何を地図にするかはいろいろ



大事なこと

- ハザードマップは「科学で考えた目安」。「絶対こうなる」わけではない。
- ハザードマップの作られ方は統一されていない
- マップが作られていないところも
- ハザードマップに描かれていないこともある（例えば火事、交通渋滞、原子力発電所の事故）

↓
ハザードマップは、未来の予言ではありません。
「こうなるかもしれない」と考えるきっかけとして、使ってください。

家族で新聞を作ろう

- 学んだこと、調べたことを、新聞にする方法をお話しします。
- 新聞は、「わかりやすく」「伝える」ものです。
- 新聞にまとめ、いつでも読み返せるようにしておく、思い出したり、確認したりするのに役立ちます。

新聞の例

手書きでもパソコンでもOK
書きやすい用紙を郵送しました。



地震は予知できるのか

- 最先端科学でも「地震予知」はできません。
- でも、確かなことは言えなくても、地震の起こり方の特徴はいろいろわかってきました。
- 特に、ひとたび地震があると、そのあと、そのまわりで地震が起こりやすくなるということがわかっています。



日本の新しい防災のしくみ（2017年から） 「南海トラフ地震臨時情報」

- 南海トラフ地震の発生する確率が普段より高まったとき（ひとたび大きな地震が発生し、別の大きな地震が起こることが心配されるときなど）、気象庁が発表します。
- この情報が出たら、海の近くで避難が間に合わない人たちは避難し、そうでない人たちも、地震の備えを確認することにより、被害を減らすことができます。
- この情報が出ずに地震が起こったり、情報が出て地震が起こらなかったりすることも十分あるので、注意が必要です。



- 南海トラフ地震より身近な災害がある参加者は、その災害を取り上げても良しとした。
- とにかく防災に興味を持ってもらうことが第一
- 21新聞のうち、南海トラフ地震に関するものは7つ



できあがった新聞の例

地震はまた、いつか、必ずくるんだと思いました。ずっと昔の地震の記録が残っていることがびっくり (小3)

南海トラフ地震をはじめとする災害に、ただ不安になるだけではなく、対策を考える機会になりました。津波を心配する娘に、津波の心配はないことを伝えることができよかったです。(保護者)

参加者からの感想

南海トラフ [臨時] 情報というのを初めて知りました。情報がでてても地震が起きないこともある、出なくても起きることがある。どちらの場合でも大丈夫なように備えることが大切。(小3)

第一回ワークショップで学んだことを子どもなりに消化して、それぞれが取り組んだことがわかる発表であったことがよかったです(保護者)

ワークショップまとめ

- ・ 参加した家族は、全員、充実した新聞を完成させ、ワークショップを肯定的に評価。各家庭で防災対策への取り組みにつながった
- ・ 勉強や知的好奇心を満たすために参加し、防災が結果として促進された形
- ・ 「家族で新聞づくりオンラインワークショップ」は、都市部の市民に比較的気軽に実施可能。市民が南海トラフ地震、臨時情報、自然災害一般に主体的に取り組む最初のきっかけづくりとして有効

今後の課題

- ・ 市民の防災活動の持続・発展
- ・ 防災に全く興味のない人に働きかけること

謝辞

ワークショップに参加して下さった皆さまに、
深く御礼申し上げます。